

短期大学幼児教育科学生の音楽学習について

—ピアノに対する意識を中心に—

On the Musical Learning Ability of Childhood Education
Majors at the Junior College Level :
Her Awareness of and Attitude toward the Piano

(1996年3月26日受理)

土谷 由美子
Yumiko Tsuchiya

Key words : Piano, 進度, 意欲

はじめに

本学幼児教育科では、以前には入学試験にピアノ実技試験を課していたが、受験生の観点から見て、受験科目の中にピアノ実技試験が入っているということが、受験に対しての難易度を高めるといふ心理的影響がでてきたことや、近隣の短大が入試科目から取り除いてきたことにより、本学幼児教育科も平成元年度の入試科目からピアノ実技試験を取り除くことになり、今日に至っている。

その結果、入学時点ですでに高度な曲が弾ける学生と、全く楽譜の読めない学生の差がでている。そして、限られた時間の中でマスターすべき曲をこなしていかなければならない。著しく進歩する学生と、足踏み状態の学生がいるが、入学時点で高度な曲が弾ける学生が進歩するとは限らないし、全く楽譜が読めない学生が足踏みするとはいえない。

また、現在の学生は容易な方へ進みたがり、幼稚園・保育園への専門職の就職試験に出題されるピアノ実技が高度になったり、直接保育現場では使われないような曲が出題されることなどに影響されて、就職試験を受けるために相当の努力をする学生ばかりでなく、難しいところは簡単に断念する学生がでてきている。専門職への就職が困難な時代になってきたとはいえ、入学時には、保母、幼稚園教諭になりたいという夢を持ってきているはずである。その夢を達成させたいと、ピアノ担当者全員が考え指導をしているのだが、菊地他(1992)¹⁾の保母養成校の音楽教育のあり方についての研究を参考にし、学生が1年間レッスンを受けた上で、感じていること、意識していることを知り、今後の指導方法の参考にすべく検討を試みたのでこれを報告する。

研 究 方 法

研究対象は、本学幼児教育科平成7年度入学生の内144名である。

時期については、平成7年12月～平成8年1月にアンケートによって調査を行なった。

調査項目については、

- (1) 入学時までのピアノ経験の有無
- (2) ピアノ経験者の経験年数
- (3) 入学後のピアノ進度
- (4) 音楽の得意度
- (5) レッスン時間
- (6) レッスン指導状況
- (7) レッスンの楽しさ
- (8) レッスンへの意欲
- (9) レッスン受講後のピアノ好感度
- (10) ピアノ練習負担度

である。

結 果

(1) ピアノ経験の有無

本学幼児教育科入学時までにピアノを習ったことのある学生は、75.7%である。(表1参照)

表1 入学時までのピアノ経験 (%)

ピアノ経験ある	75.7	ピアノ経験ない	24.3
---------	------	---------	------

(2) ピアノ経験年数

入学時までにピアノを習ったことのある学生の経験年数については、5年以上が33.0%、次いで10年以上が29.4%と長期に習っていた学生が多かった。(表2参照)

表2 ピアノ経験者の経験年数 (%)

1年未満	1年以上	2年以上	3年以上	5年以上	10年以上
6.4	11.9	10.1	9.2	33.0	29.4

(3) 進度の自覚

入学時までのピアノ経験者は、1年終了時までに61.3%、ピアノ経験のない学生の54.3%が普

通だと感じていた。よく進んでいると感じている学生は、入学時までのピアノ経験者9.0%に対し、ピアノ経験のない学生は17.1%と高かった。(表3参照)

表3 ピアノ進度 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
よく進んでいる	9.0	17.1
普通	61.3	54.3
全然進んでいない	29.7	28.6

(4) 音楽の得意度

音楽が得意かどうかでは、入学時までのピアノ経験者の60.5%が得意であり、ピアノ経験のない学生の62.9%が苦手であり対照的である。(表4参照)

表4 音楽の得意度 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
得意	60.5	37.1
苦手	39.5	62.9

(5) レッスン時間

レッスン時間については、充分だと感じている学生が90%以上であったが、入学時までのピアノ経験者の7.3%がレッスン時間が足りないと感じているのが目立った。そしてピアノ経験のない学生でレッスン時間が足りないと感じている学生はいなかった。(表5参照)

表5 レッスン時間 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
充分	92.7	100.0
不足	7.3	0.0

(6) レッソンの指導

レッスンの指導については、入学時までのピアノ経験者も、ピアノ経験のない学生も80%以上が普通だと感じているが、入学時までのピアノ経験者の20%近くが厳しいと感じているのが目立った。(表6参照)

表6 レッスン指導状況 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
厳しい	18.2	11.5
普通	81.8	88.5

(7) ピアノの楽しさ

ピアノレッスンの楽しさについては、楽しいと感じている学生が70%以上であったが、入学時までのピアノ経験のない学生の5.7%が全然楽しくないと感じていた。(表7参照)

表7 レッソンの楽しさ (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
楽しい	73.7	74.3
少し楽しくない	25.5	20.0
全然楽しくない	0.8	5.7

(8) レッスンへの意欲

レッスンに対する意欲については、入学時までのピアノ経験者も、ピアノ経験のない学生も、80%以上の学生が意欲を持っていた。(表8参照)

表8 レッスンへの意欲 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
意欲がある	82.6	80.5
少し意欲がない	16.5	16.7
全然意欲がない	0.9	2.8

(9) レッスン受講後のピアノ好感度

レッスン受講後のピアノ好感度では、入学時までのピアノ経験者の85%以上が好きになっていた。ピアノ経験のない学生も80%の学生が好きになっていたが、全然好きにならなかった学生が8.6%いるのが目についた。(表9参照)

表9 レッスン受講後のピアノ好感度 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
好きになった	85.2	80.0
あまり好きにならなかった	14.8	11.4
全然好きにならなかった	0.0	8.6

(10) ピアノ練習負担度

ピアノの練習については、入学時までのピアノ経験者の40.5％が負担に感じ、ピアノ経験のない学生の54.3％も負担に感じていた。(表10参照)

表10 ピアノ練習負担度 (％)

	入学時までのピアノ経験者	ピアノ経験のない者
負担である	40.5	54.3
あまり負担に感じない	50.5	37.1
全然負担に感じない	9.0	8.6

考 察

厚生省児童家庭局が示している保育養成専門教科目教授内容ソースブック(1972)²⁾によると、音楽Ⅰの目標に、「1. 音楽学習の経験を通して、創造性を伸ばし、生活にうるおいをもたらし、豊かな人間性を養わせる。2. 保育者に必要な、幼児音楽教育技術を身につけさせる。」とある。本学幼児教育科では、この目標を根底に置いて、特に、2. の保育者に必要な、幼児音楽教育技術を身につけさせることに力を入れてきている。能力的に異った学生のグループで形成され、指導時間も限られているが、個々の将来の目標である専門職へ就きたいという希望は一緒であるので、その過程を上手く導いていかねばならない。

ピアノ経験の有無について

入学時までのピアノ経験のない学生は、昔からあったピアノのおけいごとだけでなく、曽我部他(1985)³⁾でみられるように電子オルガン、バイオリン他と音楽面でも幅広くおけいごとをするようになったし、土谷他(1990)⁴⁾でみられるように、スポーツ面でもおけいごとが増えてきたこと、および親の希望により早くから塾へ通う子どもたちが増えてきたからであろう。入学時までのピアノ経験者は、ピアノを習っていたことが生かせ、有利な状態で専門職へ進んでいこうとし

ているものと考えられる。

ピアノへの意識について

入学時までのピアノ経験者の少数の学生や、ピアノ経験のない少数の学生が練習不足となり、ピアノ学習の進み方が遅くなり、ピアノ教科が苦手になっていく理由として考えられることは、入学してから短大生活には慣れるものの、教養科目、専門教科への勉学が負担となること、遠距離通学のための疲労が重なること、家や下宿へピアノを置いていないこと、学内行事や部活動へ積極的に参加していること、アルバイトに精がではじめたことなどがあげられよう。入学時までのピアノ経験者が入学してからピアノが全然進んでいないと感じている理由のひとつには、ピアノ担当教員が、より高度な技術をマスターさせようとし、細かい指示をすることが学生の能力、持てる力と相反しているのかもしれない。ピアノ担当教員との意志疎通がうまくいっていないのか、入学時までのピアノを習っていた時の失敗や精神面での打撃から苦手意識を持っているのだろう。

入学時までのピアノ経験のない学生が苦手意識を持っているのは、幼児期、小学校、中学校、高校時代に音楽に対して、あまり接する機会がなく、自分の持つ音楽に対する能力を発揮させる環境が整っていなかったからであろうと考えられる。

レッスンへの意欲について

レッスンへの意欲は、入学時までのピアノ経験者も、ピアノ経験のない学生も80%以上が意欲を持っていると答えていることから高いと考えられる。これは、専門職へ就きたいという強い気持ちがあり、それにはピアノが必要不可欠なものであると自覚しているからである。この意欲を失わせない指導をするよう配慮しなければいけない。そのために考えられる原因としてはまず、学生自身とピアノ担当教員との相性がよくない場合、学生自身の練習不足からくる緊張感により、ピアノ担当教員の言動を素直に聞き入れられなくなっている場合から、意欲はあるものの、レッスンが厳しい、楽しくない、ピアノが好きにならないと感じてくるのであろう。

したがってその対策としては、ピアノ担当教員は、学生の気持ちを思いやり、学生の感性、音楽的能力を伸ばしていかなければならない。学生とは、ピアノ担当教員の熱意を感じ取り、素直に受け入れられるような信頼関係をつくれるようにさせたい。

また、教材に工夫をすることも対策のひとつと考えられる。たとえば、限られた時間の中で学生の理解力、集中力、持続力をつけさせるために、決った教則本にとらわれることなく、ポピュラー、アニメの主題歌、コマーシャルソング、歌謡曲等をピアノ曲にしたり、学生と連弾を試み楽しくピアノに向かえるようにしたい。

授業形態やグループ構成などの面でも改善ができるのかもしれない。たとえば、時間割作成上困難を要するのだが、同レベルの学生を一組のグループにし、いい意味で競わせて他の学生のレッスン

も真剣に聴き吸収させたい。

また、保育現場や幼児をとりまく環境などが、めまぐるしく変化している時代の中、使われる童謡も年々変わってきていると思う。幼稚園・保育園の先生方の協力を得て、できるだけ広範囲に調査してその童謡曲をまとめ学生に知らせ練習させることにより意欲を持たせ、専門職に就いた時に怖じ気を持たせないで楽しくピアノに向かえることができるように導きたい。

おわりに

当面早急に対応しなくてはいけないのは、学生とピアノ担当教員との相性である。相談を持ちかけてくる学生に対して、話をじっくり聞き、励ましている現状であるが、ピアノ担当教員を変更しても、また、同じことが起きる可能性もある。心理学の教科担当教員にも相談をし、対処していく考えである。また、今後の研究課題としては、次の2点がある。よく進んだと感じている学生と、進まなかったと感じている学生の意識や学業との関連を調査すること、およびその学生が専門職に就いてからの現場での音楽との関わり方について追跡調査をして、授業内容、授業形態、教材をより充実させ、現場での即戦力を身につけさせることが課題であると考えられる。

引用文献

- 1) 菊地明子・木越久子・北川裕子・佐藤美恵・鶴間順子・松原靖子・松村万里子・森岡律子, 1992, 保母養成校の音楽教育のあり方について, 保母養成研究 10
- 2) 厚生省, 1972, 保母養成専門教科目教授内容ソースブック
- 3) 曾我部司・土谷由美子, 1985, 乳幼児の生活環境と音楽に関する研究(第1報), 中国短期大学紀要, 16
- 4) 土谷由美子・谷本満江・荒木タミ子, 1990, 子供と遊戯活動について(II), 中国短期大学紀要, 21